

おっさんの リメイク冒険日記

～オートキャンプから始まる
異世界満喫ライフ～

試読版

緋色優希

イラスト 市丸きすけ

ツギノル
ブックス

プロローグ

ただただ面倒な人生だった。車を駆りながら、ふとそう思う。

働いて、働いて、働き続けた挙句に体を壊し、休職。迷惑をかけたと疎うとまれ、追われるように退職した。

辞める直前に聞いたが、トップダウンで違法な指令が出ていたようだ。ご丁寧なことに緘かんこう口令れいまで敷かれていた。多くは語れないが、大勢死んでしまった。生きて出られた自分は、まだよかったのだろうか。

こんな体で働きに出ることなどできず、引き籠かごってわずかな貯金を食い潰つぶしてきた。家族がいなくて幸いだった。

退職から7年が過ぎて53歳になり、もうあとは死ぬばかりの身であったが、何の因果か宝くじで8億円も当たってしまった。もう今さらだろ。女遊びをできるような体ではないし、海外旅行もしんどい。多少、贅ぜい沢に飲み食いするのがせいぜいだ。体を壊しているせいかな、酒も昔のように美味くはない。

それまで使っていた車が古かったので、少し気になっていたT社のオフロードタイプに買い替えた。デフロックやハイロー切り替えなど、オフロード用特殊装備を備えたところが何となく気に入ったのだ。生産中止間際の車だが、俺みたいな物好きな客からの注文が途切れないので、国内だけはかろうじて販売を継続している。こんな俺には似合いな車だ。

もう11月も後半になる。こんな季節にどうかと思ったが、せっかくオフロードタイプの車を買ったので、オートキャンプ場で楽しむことにした。バンガローには、暖房器具や貸布団もある。いろいろな道具を持ち込んで、キャンプつばさを堪能するつもりだ。

キャンプ場は、県内のかかなり山深い所にある。途中の幹線道路まではよかったが、現地に近づくとつれて道は狭くなっていた。途中のコンビニで休憩しつつ、慣れない大型車を取り回しながらゆっくり進む。窓の外には紅葉の景色が広がっており、休日だったら渋滞にはまりそうだ。

狭い山道をしばらく走ると、ようやくキャンプ場に到着した。慣れぬ道なのもあって疲れてしまったが、久しぶりのキャンプ場に心が躍っている自分がある。今日はきつと貸し切りだなのんびりしよう。

受付を済ませて、まずは売店を覗く。菓子やら簡単なキャンプ用品などが売っている。高いな。普段なら絶対買ったりはしないが、気になった。売っている商品が、何故かとても気になった。体の奥底からそんな衝動が突き上げてくる。財布の中には、50万円ほど入っていた。

これは自分の本能、いや第六感が働いているのだろう。そう感じた。そして、衝動のままに買い込むことにした。こういうことは、今までにもあった。訳が分からなくても従うべきなのは、経験則から知っている。「理屈でなく分かってしまう」能力なのだ。無視した場合、必ずとんでもないことになり、思いっきり後悔する羽目になる。

スナック菓子にカップ麺、その他の食いや調味料。カップスープやウーロン茶などの飲み物。キャンプに付き物の蚊取り線香、防虫スプレー、殺虫剤などを買い漁った。

ワインが20本くらい売っていたので、全種類大人買いする。カップの日本酒、牛乳、氷、アイスなど、今買ってどうするのだと思ったが、衝動がどうにも抑えられない。抗うことができないうちに激しく強い衝動、狂おしい切望。最近久しくなかったことだ。身を任せるのも悪くない。こいつと付き合うと、とんでもなくわくわくすることに出会える。最近、そんな機会もトントなくなっただけだ。

食器用洗剤、ガスカートリッジ、乾電池、木炭、薪。自販機のジュース類も一通り購入してしまう。自分でも呆れるが、止まらない。洗濯機用の個袋入り洗剤、柔軟剤も購入した。

かなりいろいろ持ってきていたのだが、レンタル品も揃えた。布団セット、暖房器具、予約のいるファイヤースタンドは予定していた。それに加えて、ランタン、ざら板、湯たんぽ、調理器具各種、鉄板、かまど、大中小鍋、カセットコンロ、マス釣り用の釣竿まで一式借り受ける。止まらない。自分の意思では止められない。体が勝手に動いてしまう。

結局、車の中が荷物で一杯になってしまった。しかし、不思議と後悔がない。何に使うものやら、最早自分でも楽しみになってきた。これらは、必ず使う機会があるに決まっているのだから。

バンガローに車を着けて、荷物を降ろそうとした途端、濃密な霧が立ち込めた。立ち込めるというより、押し寄せたといった方がいい。いきなり飛行機が雲の中に入ったかのように、世界が純白に包まれた。半世紀以上も生きてきて、こんな濃霧に出くわしたのは初めてだ。普通じゃない。あまりのことに放心状態になったが、3秒後に我に返ってドアを閉じた。

「やれやれ、山の天気は変わりやすいなあ」

この状態でやたらと動くのは危険だし、慌てることはなかった。どうせゆっくりするつもりで来たのだ。霧が晴れるのをのんびり待とう。

買ったばかりのスマホを見て、顔を顰める。圏外だ。この山奥なら無理もないのかもしれないな

い。諦めて音楽を聴くことにした。かなりの曲数を保存していたのだが、1曲聴き終わる前に睡魔に襲われた。50代の体には、慣れない山道走行が応えたのだろうか。オートキャンプなんて無謀だったかな。そんな想いを抱くも、睡魔には勝てず、濃霧よりも深い闇へと墜ちていった。

おかしな夢を見た。何だか分からないが、自分がパソコンのシステムを組んでいるようだ。ああでもないこうでもないと言いながら、時間がながい、時間がながいと焦っている。

まるで、不思議の国のアリスに出てくるウサギさんみたいだなと、夢の中でぼんやりと自分のその姿を眺めていた。

10分余り経ったのだろうか？ 目が覚めて辺りを見回すと、霧がだんだん晴れてきた。ほっとして、荷降ろしをするために車を降りると、違和感を覚えた。何だ、これは。……森の中？ オートキャンプ場は確かに森の中みたいな場所ではあったが、もっと開けていたはず。

目の前にあるのは鬱蒼とした森で、隣のバンガローもない！ それどころか、管理棟もなく、周りを樹木で囲んだ風景が広がっていた。

あるのは自分の借りたバンガローと車だけ。足元をよく見ると、小山のようになっていて、

車やバンガローが傾いている。さすがに驚いた。寝ている間に地震でも起きたのか？ ただ、地面の色の違いが、まるでそこだけが引きちぎられたかのような様相を呈していた。



その頃、日本でも異変が起こっていた。

キャンプ場の管理人は、霧が出ているのに気付き、少しお客さんの心配をしたが、そのうち収まるだろうと思いき直し、風呂の支度をすることにした。

だが、いきなりブレーカーが落ち、建物の外にある照明がふっと消えた。

「おや？ どうしたのかな？」

他の電気設備も、電力が切れているようだ。電源設備を確認しに行ったが、施設全体の電源が遮断されていた。今まで、こんな経験をしたことはない。何か設備に異常が出ているかもしれないと思い、各所の点検に赴いた。

管理棟は特に異常が見受けられないため、バンガローを見に行くことにした。今日使用している棟で、何かが起きた可能性は否定できない。100mほど離れたバンガローに向かう途中、妙な違和感を覚える。何かがいつもと違う。近づくにつれ、違和感はだんだんと大きくなって

いく。そして、ついにその違和感の正体に気が付いた。

「バンガローが1つ足りない……」

そんな馬鹿な。管理人は何度も目をこすったが、やはり足りない。なくなっているのは、今日貸し出したログバンガローだ。

「お客さん？」

彼はどこに行った？ 後でお風呂に入りたいと言い、バンガローに向かったあの人は！

「おーい、お客さん。無事ですかー？」

呼んでみたが、応答はない。

よくよく見れば、その辺りの地面が直径10m以上にわたり、まるで鋭利な刃物を使ったかのようにえぐられていた。何か大変な事故が起こっている。管理人は、顔から血の気が引いていくのを感じた。

バンガローに繋がっていた電線は、無残にも切断されて地面に落ちていた。昨日の雨と先ほどの濃霧で地面は濡れており、そこに切断面が触れて異常な大電流が流れたため、遮断器が動作したとみえる。電線の切断面は、何かの刃物ですっぱり切り落とされたかのような。電力会社……いや、いや、警察の判断を仰ごう。これは普通じゃない。現場をこのままにしておかなくは……。

通報によって近くの駐在所からバイクで駆けつけた警官も驚いていた。

「これはまた……いったい何でこんなことに……」

彼も判断に困ったようだ。一応、管理人から事情を聞いたが、本署に判断を委ねることになった。行方不明者がいるため、事件性も考慮して、本署から応援が来るらしい。

一応、電力会社の人間も呼ばれたが、現場を見て言葉もなかった。こんなことは今までにあった例はない。目を見開いて、1分ほどそのまま凝視していた。

警察の指示待ちで、見守るほかはない。放っておくこともできず、腕組みしながら事態の推移を見守るが、手持ち無沙汰を隠し切れない。落ち着かない足先の動きがやや忙しい。

2時間後にやってきた、刑事と鑑識の人間も絶句した。地面深く、直径12m、深さ4mもの大穴が開いているのだ。まるで、アイスクリームのサーバーで掬い取ったかのように鮮やかな丸みを帯びて。重機を使っても、こんなことは一瞬ではできない。あまりにも削られた球面が鋭利すぎるので、原因が爆発物でないのは一目で明らかだ。戦慄しながらも、刑事は鑑識に指示を与えて捜査資料の収集を始めた。

取りあえず、キャンプ場はしばらく予約が入っていないため、ストローブや発電機を利用した。館内設備は一切利用できない。現場は全てそのまま保存された。

刑事が鑑識とともに持ち帰った現場資料を閲覧して、警察署中の人間が頭を抱えた。夜更けまで会議が行われ、1つの結論を得た。とてもじゃないが我々の手には負えないとなり、地元自治体の長と協議して、自衛隊に調査の依頼をすることになったのだ。何らかのテロの可能性も考慮したのだろう。

「何でまた、田舎の警察署で、こんな事件を扱うことになったものやら」

「全く頭が痛いすな。行方不明者がいるのでなければ、まだいいのですが……」

とにかく被害者と思われる男性の身元を洗うことにして、会議はお開きになった。

翌日、警察署長が町長の下を訪れ、知事経由で自衛隊に派遣要請するように依頼をした。現場を訪れた両者も、やはり他の人間と同じく絶句し、これはもう手に負えないと感じたようだ。ほんの30分足らずの間に、このような事態を引き起こす事象というものに、何も思い当たらなかった。想像の範疇を超えるとは、まさにこのことだろう。

「あの日、お客さんがあのバンガローに向かつてすぐに霧が出始めました。私はしばらく外にいましたので、彼の心配をして最後まで見ていました。お客さんはバンガローに車を止めて出ようとした時に霧が出て、外に出るのをやめたようです。それを見て安心していたのですが、

その直後に電気が切れたのです。だから実際にあのようになったのは、わずか1分足らずの出来事でした。私は何らかの自然災害であったのだと考えています」

管理人は、深く考え込むようにして証言した。

翌日の午前中にやってきた自衛隊の人は、車両10台の大所帯で、関係者を驚かせた。夕暮れまで調査を進めていたが、その後、電力会社に対して復旧工事の許可が下りた。保険会社の担当者によると、今回の被害は保険で補填できるようだ。

管理人は、ほっと安堵の息を漏らしたが、ここで保険会社の担当者から意外な事実を耳にする。

「うちの会社の関連だけで、同じような事件がいくつもあったのです。原因はどれも不明です。この自衛隊の人数を見ると、政府も既に把握しているのでしょう。政府の役人も混じっているようですしね」

関係者一同は、再び絶句した。この日本でいったい何が起きているのだ。この場にいる誰も、それを知る術はなかつた。

1章 おっさん、異世界に立つ

俺は大混乱していた。周囲を見渡しても、管理棟などが見当たらない。ま、間違いない。ここは……さつきまでいたキャンプ場ではない！

周りは鬱蒼と茂る森のようになっていて、小山の上にバンガローと車がある状態だ。取りあえず、車を小山から下ろす作業に取りかかる。

車から降りて足場をよく確かめると、小山の高さは3mくらいだろうか。この車なら何とかなりそうだ。

一番勾配のなだらかなルートを選んで、シャベル片手に、少し足で確認する。靴が少し地面にめり込むが、この車の走行を妨げるほどではなかった。気になるところをしっかりと整地してから、再び車に乗り込む。エンジンをかけて、低速モードのスイッチを入れた。トランスファアのレバーを4WDローに放り込み、デフロックも作動させる。落ち着いて、ゆっくりと車を下ろす。注意深く足元の感触を確かめるように、タイヤで土を踏みしめる。急勾配の柔らかい斜面を、ドキドキしながら降りていく。時折、軽くタイヤを浮かせながらもようやく小山を下りきった頃には、汗びっしょりになっていた。

汗を拭き、お湯を沸かしてコーヒーを一杯入れる。あらためてこの状況を確認してみたが、誰がどう見ても異常な状況だ。無駄と知りつつ、キャンプ場の管理人さんを大声で呼んでみたが、当然返事はない。しばらく、バンガローの立っ小山を見上げながら竹^{たけ}んだが、そのうち突拍子もない考えが浮かんできた。えー、その何だ？ まさかとは思うが、異世界みたいなどころに来ちゃった……とか？ いい年こいて？

勘弁してくれと思いつつ、「ステータスオープン」などと言っている自分がいた。

……いかん、混乱している。現実を見なさい！

だが、目の前に謎のウィンドウが現れた！

うそ！ よく見ると、使い慣れたパソコンの画面のようだった。そいつが、空中に浮かんでいる。タブレットのように使えそうな感じがするので、取りあえず「コンピューター」という部分をタップしてみる。すると、画面が切り替わった。

そこには、CDドライブからFDドライブまでが並んでいる。CDドライブから順に見ていくと、Eドライブに「アイテムボックス」と書かれていた。内容説明として「無限収納の領域」とある。え？ これって小説とかに出てくる、あのアイテムボックスなの？

使い方が分からないので、試しに車からバッグを出して画面に突っ込んでみた。次の瞬間、



553-20	A-55-00	70-8A	20A
553-7	U-5A2-C00	U-5A2-C00	02 20
70/197	553-7	553-7	03 20
553-9	U-5A2-C00 020000	U-5A2-C00 020000	04 20000
553-10	553-7	553-7	05 10
553-11	553-7	553-7	06 10000
553-12	553-7	553-7	07 100 00000
553-13	553-7	553-7	08 100 10000
553-14	553-7	553-7	09 100 10000
553-15	553-7	553-7	10 100 10000
553-16	553-7	553-7	11 100 10000
553-17	553-7	553-7	12 100 10000
553-18	553-7	553-7	13 100 10000
553-19	553-7	553-7	14 100 10000
553-20	553-7	553-7	15 100 10000

バッグがいきなり消えてしまった。何だ、こりゃあ! よく見ると、Eドライブに「バッグ1」とある。タップすると中身が展開された。どうやって出すんだ? 元に戻し再びタップすると、取り出しますか? Y/N」と大きく出たので「Y」をタップする。なるほど。スマホやタブレットみたいに使えるんだな。突然、手の中にバッグの持ち手が現れたので、落としそうになる。マジですか。

アイテムボックスの「ヘルプ」をタップすると、次のように表示された。

無限に物体を収納できる。基本的に時間停止状態にあり、物が腐ったりはしない。設定により変更もできる。ボックス内に新規のファイルを設定することで、専用のインベントリを作成できる。インベントリとは特殊なファイルで、水やガソリンなどの容器代わりに使用したり、中で付与や強化などの加工に使ったりできる。状態などは、本体とは別設定にできる。意思ある生物は収納できない。

アイテムの保存と、新規インベントリ作成が分かれているのか。最初から機能が異なるんだな。

取りあえず、食料などをアイテムボックスの一つ一つ仕舞ってみたが、途中で面倒になって

車ごと入れてみた。……入った。入ってしまった。心配なので、1回出してみる。うん、問題なし。あらためてアイテムボックスに入れ直す。

さつき、車を小山から下ろした苦勞は、いったい何だったのだろう。もう1回、アイテムボックスの詳しい説明を見てみる。

コピー機能があり、MPを使って物体をコピーできる。MPが回復量を超えて限界まで消費されると、MPレベルが上がる。稀人まれびとの場合、通常はLVアップで元値の2倍となるが、EXP±のスキル補助により、補正増減はその2倍から始まり、最大で 2×1.28 倍（256倍に到達以降は全て256倍）となる。拡大縮小コピー、部分コピーも可能。

……何だかチートくさい機能が表示された。稀人？俺みたいな迷い人のことか？通常の2倍増でも十分チートではあるな。

よし、コピー機能も試してみよう。ファイルを作り、名前を「元本」とした。そこへ車を放り込んだ後、タップして展開してみた。車に積み込んでいた物がリストアップされる。

まずは、命の水である2Lペットボトル水6本入り箱をコピーする。説明によると、アイテムボックスを開いて表示される内訳項目の「コピー」をタップするようだ。別ウィンドウがポ

アップして、中身が写真付きでずらっと表示された。上部には、10/10MP・LV1と表示されているが、これでどれくらい使えるのかな？

「2Lペットボトル水6本入り箱」をタップして取りあえず通常コピーを指定すると、ドンツと足元に箱が現れた。うおう！ 本当にコピーできた。これで水には困らないだろう。助かる！ 水探しから始まるサバイバルは、おっさんには無理だ！

コピー後、MPは5/10となった。MPとは金額か？ 1MP＝100円分くらいなのだろうか？ いや生成する物の質量なのかもしれない。

タップ作業が面倒になってきたので、もう1回説明を見てみると、どうやらイメージしただけでも出し入れやコピーはできるらしい。

コピーを繰り返してMPを使い切ったら、40MP・LV2へとレベルアップした。本来20MPになるところが、EXP±のスキル補助によってその2倍ということらしい。これで4000円分くらいだろうか？ MPを使い切ってレベルアップする時、MP不足で倒れたりしなかった。これは重要だな。このMPというものは、「領域の確保」に過ぎないのかもしれない。ハードディスク内でゲームの使用領域の確保を随時行う、というようなイメージだろうか。

続いて、いろいろな食料をコピーしていると、今度は40×2×4で320MP・LV3にな

った。どこまでレベルアップできるのかなと思って説明を見ると、24時間でMPが回復とある。つまり、24時間以内にMPを消費し切れなくなったら、レベルは頭打ちということか。ありがたいことに、それはまだ先のようなのだ。

日用品などのコピーも行っていると、5120×2×16で16万3840MP・LV5になった。ついに車を、いや車の中の荷物全てをコピーできるだけのMPに到達したのだ。車ごとコピーして、車コピー[〃]ファイル[〃]をタップすると、本物の車が現れた。頭がくらくらする。こんなことってあるのだろうか？ 50を過ぎたおっさんには、なかなか受け入れがたい現実だ。元本の方も出してみたが、見事に2台の車が並んでいる。頭がおかしくなりそうだった。

取りあえず、車中の荷物だけのファイルと車だけのファイルを作成すると、前者が[〃]中身の荷物だけ[〃]、後者が[〃]車・車体のみ[〃]と表示された。引き続き、車のコピーを作っておく。数台作ったところでレベルアップし、1048万5760MP・LV6になった。ここまでくれば、当座は十分なレベルだろう。

後は武器になりそうなものを、何か出しておこうか。持ってきた物の中から、まずシャベルを出す。自宅にあったシャベルはさびてボロかったのだ。先の尖ったタイプを購入して車の荷台に放り込んであったのだ。シャベルは、兵士が武器として使うこともよく知られている。

次に小さめの薪を作ろうと思いついてきた手斧と鉞なた。鉞は日本製の結構いい物だ。

あと、役立ちそうなのが狩猟用の和ナイフ。こんなもんいらないうらなうと思つたが、サイトを見ていたら欲しくなつて、ついつい買つてしまった。刃渡り26cmの完全な観賞用だ。気分で作つてきただけの代物だが、この状況になると非常に助かる。

手斧と和ナイフについては、1・5倍と2倍の拡大コピーをして、数も揃えておいた。この世界に何がいるかよく分からないので、準備は万全にしておいた方がいいだろう。

もともと用意周到な性格だが、2泊3日でよくぞここまでいろいろと持つてきたものだ。キャンプなんて久しぶりだが、この3日楽しみ尽くそうと思つてきた。何にせよ、衝動に任せて買いまくり、持ち込んだのが吉と出た。少なくとも食うには困らない。

取りあえず、しばらくはこの場所に留まつてみることにする。こういう神隠しのようなものは、時間が経つと元の場所に戻る可能性があるからだ。3日間は居座ることに決めた。

とにかく、おっさんの異世界キャンプの始まりだ。といっても、特別なことをするわけじゃない。テントも建てないので、やることといつたら、BBQの仕度をするだけだ（今日はやる気にもなれないが）。水や食料が大量にあるので、危機感が全くない。車やガソリンもあるしね。小山の上のバンガローに戻ると、まずはビールを1杯。それで、人心地がついた。すぐ眠れるように布団を敷き、電気カーペットと電気ヒーターで暖めておく。

トイレを作るため、アイテムボックスに土を収納することで穴を掘った。イメージ通りの穴になって、ちょっとだけ嬉しい。ゲリラ兵みたいに、落とし穴が掘れそうだ。穴にはコピー品のバケツを埋め、そこにビニールを被せて使い捨てトイレにした。

気付いたら既に16時を回っており、森の中ということもあってかなり薄暗い感じになってきた。ファイヤースタンドで火を熾おこす。初めてなので30分くらいかかってしまったが、火が燃え盛って満足だ。完全に暗くなる前に、ガスの2口グリルを使って夕食の準備に取りかかる。あと燃え盛る直火に網を載せて炙ってみました。といっても、肉やウインナー、ハムを焼いただけの簡単なものだ。

ビールを飲みながら、これからのことをぼんやりと考え込む。
そういや、例のパソコンみたいな画面を見ておくか。

「コンピューター」欄には、「ステータス」という項目があった。これは、いわゆるステータス画面だな。

種族…人族 性別…男性 年齢…53 称号…迷い込みし者

HP…LV1 500 / 500 MP…LV6 1048万5760 / 1048万576

0

スキル

EX P ±

PC インターネット

MAP レーダー

アイテムボックス | 付与・コピー・加工・分解・合成

身体強化 再生 鑑定 解析 異世界言語 隠蔽 全属性魔法

おおー、称号は情けないけど、その他は結構なチート具合だ。表示がシンプルで、年寄りにはありがたい。

取りあえず、今日はここまでとして、就寝することにした。



目が覚めると、木目の天井が目に入ってきた。状況がすぐに理解できない。

何だ、ここは……あ、オートキャンプ場だ。外に出たら、そこは森の中だった。全部思い出した。異世界みたいな所に来たんだった。

昨日、確認の途中だったステータスを表示してみる。まず、PCスキルがすごかった。

インターネット…異世界から地球のインターネットに繋ぐことができる。

クレジットカードやネットバンキングで有料サービスも受けられる。

うお！ 何だ、これ!?

「PC」を開いて「接続」タブをタップすると、何とネットに繋がった。いつもやっているゲームにもログインできる。す、すげえ。知識面を考えると、一番すごいスキルではないだろうか。あとは、定番といえるものしかない。

そういえば、オートキャンプ場に置いて寝てしまった時、夢の中で何か作業をしていたの思い出した。あれは、このシステムを作っていたのだろう。PCスキルだって、ほぼパソコンのコピーだ。手抜きというか、時間がなかったと思われる。

次にMAPをタップすると、いつも使っている地図が表示された。うん、普通に使える。PCスキルの各種機能は、いつも愛用していたソフトやサイトそのままのようだ。

MAPを世界地図表示にしてみたら、どうやら地球の世界地図ではなかった。現在地は、ど

この大陸のようだ。「よかった。無人島じゃない」

周辺を見ると、かなり離れた所に大きな街がある。地図上の街をタップすると写真が表示されたが、とんでもない画像がいろいろと現れたので、そっと閉じた。

「武装した物騒な人たち」がいっぱい、街へ行くのが躊躇たどたどわれる……。

気を取り直して、リーダー機能を見た。敵を識別できるようだ。敵は赤点で表示され、脅威の度合いが高く大きく、激しく点滅する。味方は緑、それ以外は黄色の表示だ。設定を変更すれば、夜中の敵襲に対しても警報を出せるみたいだ。

武器があれば、アイテムボックスから、赤点に向かって射出もできる。

「うお、マジか」

ちょっと試してみることにした。ナイフをコピーして、目視で目標を定めた。高い所から出すイメージで、高さ20mから目標地点へ。

見事、地面にぶつかりと突き刺さった。あまり高い所から、近くにいた敵を狙うと、風に流されたりするから怖い。射出する高さについては、いろいろと試してみよう。

アイテムボックスの付与では、取り込んだものにスキルや魔法を付与できるようだ。これを利用すれば、強化剣や魔法のカバンができるかもしれない。さっきMAPの画像で見た限

りでは、あまり治安はよくないと思われる。街は、剣や槍で武装した人間でいっぱいだし、人間じゃなさそうなもいた。

というわけで、取りあえずの武器に強化を付与しておこう。

まずは、アイテムボックス欄で付与のインベントリを作成した。いわゆる専用の作業スペースだ。そこに狩猟用ナイフを入れ、付与——身体強化——をタップして完了。仕組みはよく分からないが、物体に身体強化を付与すると、強化されたままになるようだ。ヘルプを見ると、この操作は念じるだけでできるらしい。

あとは、自分自身にも「身体強化」を使ってみよう。上手にやれば、これで戦闘力が上がるかもしれない。スキル欄の「身体強化」をタップすると、体に力が漲みなった。まるで電力でモーターが起動するような感覚だな。筋肉が唸うなりを上げるように力強く脈動し、肉体がそのパワーに耐えられるように、頑丈に組み替えられていくイメージだ。説明によると、MPの消費によって力を強くしたり、体を強化したりしているようだ。ちなみに今LV1とある。

さらに重ねがけしていくと、上乘せでパワーアップしていく。ただし、重ねた分は1回に比べて2乗の魔力を消費する感覚がある。魔力が少ないうちは、最強モードは長続きしないのか。よく覚えておこう。しかし、ポロポロのおっさんにはキツイな。

これで、身体強化と武器ができた。続いて、デイバッグに「アイテムボックス」を付与して

みた。設定画面では、無限収納のみを設定して付与する。確認すると、ちゃんと魔法のカバンになっていた。さらにこれをコピーしても、収納の機能が付いていた！

次が「再生」か。これはアイテムボックスの中の物にもかけられるようだ。古いコンロにかけてみると、何と新品になった！すごい。ただ同然の中古品を買ってきて、再生して売れば大儲けだ。などと、こっちの世界で生きていかなければならないことも、頭の隅で計算していた。

ここで、はたと気が付いた。これは人間には効くのか？ 試してみたい。ヘルプをじっくり見たら、人間にも有効とある。よし、まずは植物で試してみよう。その辺にあった萎れた草に「再生」をかけてみると、元気にシャキツとした。動物にはどんな結果になるのか分からないが、ここは自分の勘を信じてみよう。

覚悟を決め、「再生」対象を自分にしてタップしたところ、体中にすさまじい力が駆け抜けていく。MPのレベルLVが1つ上がったような気がする。

「おお……」

車のミラーで見ると、おそらく22歳頃の最盛期の肉体がそこにはあった。白髪もなくなつて、全体的に焦げ茶色に近くなっている。身長168cm、体重58kg。瞳は茶色で、彫りの深

い顔立ちだ。

驚愕しつつも、己の拙い脳のシナプスを激しく明滅させた結論は、この再生というスキルは、対象物（人）を今ままで最もピークの状態に戻すものなのだろう。使用回数とか制限はあるんだろうか。そうでなければ、即死以外は不死ということになってしまふ。やたらと使うべきものじゃないなと感じた。こういう能力を使って悠久の時を生き延びたが、最後には生にしがみついたために悪行を重ねて悲惨な死を迎えるという物語も多い。そんなのは御免だな。

身体が再生されると、健康面で具合が悪かったところも全てよくなっていた。目や歯、筋肉などポロポロだったが、昔のように、いやそれ以上の状態だ。頭も妙にスッキリしている。いかん。余計なところも元気になっているようだ。

MPは約13億4000万MPで、LV7になっていた。しばらくは上がらないだろう。

魔法は何も入ってないので不明だ。《全属性》とあるし、MPも半端ないので今後に期待しよう。

《隠蔽》は、このシステムを隠蔽するものようだ。アクティブになっているので、他からは見えないはずだ。隠蔽のかかった状態でも、ステータスを見ることが出来るスキルがあるかもしれない。

だいたい機能を把握したところで、取りあえずもう少し武器を作っておくとしよう。

斧を各サイズと、鈍、シヤベル、投擲用に拡大コピーしたアウトドアナイフ。

アイテムボックスには、分解機能があった。分解を使つてウイスキーの瓶と中身を分離して、瓶にガソリンを詰める。即席の火炎瓶だ。

同様に、車のコピーを分解して、板金の溶接前まで戻してみた。これを頭の上から落とされたら、悲惨なことになるだろう。エンジン、スチールホイール、フレイムなどの重量物も分離する。これはアイテムボックスから空中に射出したら、すごい攻撃になりそうだ。

ガソリンをインベントリからぶちまけて、火のついたマッチやライターをぶち込んでもいいだろう。水とガソリンの専用インベントリを作成して、自動コピーを設定しておく。どの道、ガソリンは車用に必要だ。

その辺の岩や石も回収しておいた。拡大コピーで大きくして、上から落とすこともできるし、身体強化で投げてもいい。

続いて、部分コピーによるカットと合成で、刃渡り46cmの和ナイフを作る。さらに刃の真ん中だけをカットしたものを中継ぎにして、より長い刃渡り66cmの和ナイフも作成。少しは刀っぽくなったかな。

それを拡大コピーで1・5倍にしたら、刃渡り99cmの大刀ができた。持ち手を握るのは、こ

れがぎりぎりのサイズだ。持ち手が大きくて不恰好ではあるが、身体強化で十分振り回せた！これも大量にコピーしておこう。上から落とせば串刺しにできるし、投げまくってもいい。木の枝を加工して、槍の柄も作ってみた。柄は生木だが、使い捨て用にはいいだろう。

今後、街に移動するとなると、金銭に替えられる物が欲しい。金はここでも価値があるのだろうか？ そういえば、金とダイヤを使った高級腕時計を付けたままだった！ 前から欲しかったので、奮発しておいてよかった。鑑定してみると、ちゃんと価値があるようだ。シルバーのネックレスと一緒にコピーしておく。

しかし、身分証や現地通貨がないのは痛すぎる。街に入れるのだろうか。MAPで街の様子は見られるものの、現地事情がさっぱり分からん。いつまでもこんな森の中にいたくないが、迂闊うかつに街に行つて捕まり、酷い目にあうのも嫌だ。

いろいろと武器の実験をしているうちに、辺りが暗くなってきた。今夜も異世界でキャンプだ。

今日は頑張つてBBQにしてみた。慣れないのでちよつと時間がかかったが、新聞紙と着火剤、バーナーが活躍してくれた。もちろん炭の用意も忘れない。

串に差した肉の香ばしい匂いが立ち込め、食欲を誘う。だが、それは俺だけではなかったら

しい。

ヤツは、突然、俺の世界を侵食した。ゾクッ。いきなり背筋が凍る。ビールは飲んでいたので、ほとんど無意識に近い感覚で身体強化を終え、横に移動しながら体を反転させた。そして、転がるようにして、ヤツとの距離をとった。

B B Q グリルが、弾け跳んだ。転がったランタンと、飛び散った炭の炎に照らされて、ヤツは闇のカーテンの中に浮かび上がっていた。その姿は生々しく、それでいて映画のようでもある。非現実感の中で、ヤツだけが現実のものとしてまざまざと存在を主張していた。

目の前にいるヤツは俺を獲物と見定めて、確実に捕らえようと機会を窺っていた。その距離3 m。ヤツの体軀は2〜3 m だろうか。闇は、異形を実測よりも膨れ上がらせる。

そこにいたものは、熊とも蜘蛛とも猿ともいえないような、まさに「異形のもの」であった。人間の顔とは明らかに異なるのに、まるで怪物の身体に人間に似た顔が仮面のように載っているかのような……そんな感じだ。

動物が、ただ見ているのとは訳が違う。知的に見ているような感じで、妙に生々しい。その白い貌かおが恐怖をそそる。そして、明らかに俺を欲していた。

無意識のうちに、鑑定が働いていた。

グリオン。魔物 Eランク

喉が異様に渴いた。ビールが飲みたいな。転がって、大地を潤したビール缶が恨めしい。だ
が生き残りさえすれば、またいくらでも飲める。

落ち着いてよく見ると、足が8本ある。猿のような指のある足に大きな鍵爪を生やし、猪や
熊のような剛毛で全身が覆われている。上野の博物館のケースの中に飾ってあった熊が、チャ
チな生き物に感じるほどだ。殺される。そう思いながら、この状況を受け入れることはできな
かった。

ヤツが動いた。少しずつ、ジャリツ、ジャリツと。心なしか、表情が笑みを象かたどっている。獲
物を噛み砕く愉ゆ悦えつ。口の端からこぼれる涎よだれ。逃げ出して、背を見せれば、爆発的な跳躍で襲い
かかってくるだろう。何の理屈もなく、その事実が理解できた。俺は念じた。死にたくない。
もう、こんな体で生きていたくない、いつそ殺してくれ。ずっとそう願っていたにもかかわら
ず、いざ理不尽な死と対峙すると、情けない生にしがみつく。こんな状況だが、人間とはこん
なものなのかと思いついた。

アイテムボックスが起動する。ヤツが跳躍に備えて全身の筋肉を収縮した刹那、その怪奇な

生物は、上空から襲う数十本の刃物に全身を刺し貫かれて絶叫した。悪魔の叫びかと思うような、呪詛と苦痛に満ちた咆哮に身震いしたが、構ってはいられない。さらに大型の鉄板を呼び出して、まだ蠢いていた悪魔の上から振り下ろした。

バスッ。鈍い音とともに首を取り落とし、闇の支配する森にずっしりと沈んだ。静けさが、夜の黙に木霊した。炭の火だけが、小さく軋々と燃え盛っていた。

俺は全身の力が抜けて、その場で尻餅をついてしまった。

ガサッ。不意の音に、みっともなく飛び上がった。慌てて周りを見るが、何もいない。ふと闇に浮かぶ、小さな赤い2つの目に気付く。小動物のようだ。もしかしたら、普段はグリオンが倒した獲物のおこぼれをちようだいしているのかもしれない。

そうだ、レーダーMAP！ 展開すると、付近に赤い点は見当たらない。さっきの怪物は灰色になっていた。俺はおそろおそろ、そいつを目視でアイテムボックスに収納してみた。入った。やっぱり死んでいる。ほっと一安心した。無防備過ぎたと反省する。取りあえず、今日はレーダーMAPとアラムを仕掛けておき、強化を何度もかけたバンガローの中で、すぐに出られるような格好で寝ることにした。



まんじりともせずに夜を過ごしたが、いつの間にか寝てしまったようだ。バンガローの中に突き刺さる朝の日差しによって、目が覚めた。そういえば、このバンガローではなぜか電気が使えている。どうなっているのだろうか？ やはり自分のMPで生成しているのか？ MP量が馬鹿みたいに増えて常に時間回復しているし、物品の中には常にMPを消費して自動コピーしている物もあるので、よく分からない。とにかく便利なので、バンガローもコピーしておいた。

取りあえず朝飯にするか。安全なバンガローの中で調理にかかる。

まずは野菜ジュースを一杯飲み干してから、ハムエッグを焼いてみる。最初からスライスされているパックのハムを持ってきてよかった。

ハムエッグが焼けるまでに、パックのサラダの封を切り、ミニトマトを添えてドレッシングをかける。あとは、オレンジジュースとヨーグルト、パンという組み合わせ。何だか日本にいる時と同じ飯になってしまった。料理ともいえないような代物だが、定番朝食セットとしてコピーしておく。

朝食を食べながら、元の世界のことを考えた。キャンプ場のこと、借りたままの物品にバンガロー、自宅マンション、管理費や町内会費などなど。マンションは、もうじき大規模修繕だ

ったはず。さまざまな銀行引き落としや、クレジットカードも心配だ。向こうは、いったいどうなっていることやら。電話は通じないが、いざとなったらメールで何とかしよう。

異世界に来て、今日で3日目だ。もう揺り戻しによる帰還は期待できないので、この場所に見切りをつけないといけない。取りあえず街を目指すか！ 昨日のようなことがあつては、街の方が安全といえそうだ。

まずは車をアイテムボックスに収納して、MAPと実際の道を照らし合わせながら、車が通れる道を探すことにした。服装は、ジーンズとTシャツ、トレーナー、ボンバージャケット、毛糸の帽子に革のブーツ。慣れないブーツで歩きにくいのが、毒蛇などへの警戒のために履いておいた。手には軍手をはめて、全てに強化を重ねがけしておく。自分も身体強化を発動中だ。武器はいつでも出せるようにしておいた。

鈍で藪を払いながら、山中を進む。レーダーMAPで監視すると、うわあ、あっちこっちに敵が表示された。

【Dランク】の敵を発見した。今遭遇したら死ぬかもしれない。近くにいないくて幸いだった。

2時間ほど歩いたら、獣道のような細い道に出た。狭くて車は通れないため、身体強化して、ガンガンと歩く。いや、ほとんど走っていた。歩けば12時間かかるところを、8時間で広めの

道に出ることができた。道の状態は悪いが、俺の車ならなんとか走れそうだ。アイテムボックスから車を出して、乗り込む。ガソリンはインベントリから直接給油できることが分かった。これはとても便利だ。車で道を走っていると、少し広めなスペースを発見した。地面は荒れているが、俺の車なら全く気にせずに上がりこめる。今日は、ここで車中泊するとしよう。

さすがに外でキャンプをする気にはなれないので、車内で飯にした。レトルトやパックご飯は温めた状態で専用のファイルにしてあり、カップ麺用の熱湯も用意してある。ウインナーやハムも焼いて、唐揚げも作ってある。今回は唐揚げとビール、そして助六という組み合わせだ。食後はおとなしく寝ることにした。実は俺の車、車体はでかいが車内は狭い。いろいろ考えたが、リヤシートを倒して、後ろで丸くなって寝た方がよさそうだ。フロントシートの上で寝ていると疲れてしまうだろう。同じオフロード車なら、荷台やシートの広いタイプにしておけばよかったか……。

エンジンはかけっぱなしで、エアコンの暖房をかける。荷台にアルミマットと寝袋に毛布敷いて掛け布団を被ると、すぐに意識を失った。

2章 おっさん、街を目指す

4日目の朝が来た。体が痛い。次はやっぱりフロントシートを倒して寝よう。

野菜ジュースとサラダ。作り置ききのハムエッグ。オニギリと味噌汁。うん、栄養はしっかりと摂らないと。朝飯は、しっかりと摂る主義だ。

出発前に、街へ入る時の自分の設定は作っておいた。

遠方からの商人。山間で静かに暮らしていたが、魔物が出るようになったので、街に出て販売を始めるようになった。生まれた国は覚えていない。家族で旅をしていたように思うが、気が付けば1人だった。盗賊、あるいは魔物に襲われたのかもしれない。ここで商売したいので、街に入る許可が欲しい。

こんな曖昧な話を通じるか分からない。戸籍とかがしっかりしていたらアウトだ。身分証がないのも重罪かもしれない。怪しい者として捕まえられたらエライことだが、このまま荒野を旅するのもつらい。かといって拷問や死罪はゴメンだ。悩ましい。

いざとなったら車を出して逃げよう。そんな感じで腹をくくった。

商品は用意してある。調味料の小分け用に買ったガラス瓶、その他、プラスチックの空き瓶を、

ガラスや木の素材に作り変えてある。そこに砂糖や塩、胡椒など差しさわりのないものを入れている。

あとはタオル。質が良すぎるような気もするが、まあ木綿製品なのでいいだろう。あまりカラフルなものはやめておいた。

そして、ウイスキーのラベル包装は全て剥がした。古酒も同様だ。瓶がヤバい技術のような気がするが、なるべく出さない方向でいこう。容器が入手できたら入れ替えればいい。

包装を剥いたクッキーも、適当な入れ物を探せば何とかかなりそうだ。同じく、パスタも外装を外せば売れるかもしれない。

インク吸い上げタイプの万年筆も持っているが、ちよつとマズイ気がする。たぶん羽ペンか何かだろうな。

現金はないが、金板を用意した。アイテムボックスを使って、角ばった形のウイスキー瓶を、時計に使われていた金の素材でコピーする。ウイスキー瓶コピー（金）というものができた。10本ほど作り、身体強化後にナイフで切り分けた。強化されたナイフなので、金は苦もなく切り分けられる。曲がりなりに金板と表示される物体ができた。

取りあえず運転していくので、軽めの服装で出発することにした。

道と思われる所を、車で進んでいく。何があるか分からないので、時速30km程度をキープする。

初期の状態のMAPには、街や街道、河などは載っているが、山道などは載っていない。ここに、オートマップ機能によって詳細な地図が作られていく。山というか、森林の詳細MAPが刻まれていくので、元の場所にはいつでも戻れる。今のところ、あの場所だけが元の世界に帰るための手がかりだ。

1時間走ると、山道に変化が現れた。石畳にはなっていないが、紛れもない街道がそこにはあった。明らかに人が作った道だ。轍わだの酷い場所がありそうだが、この車ならまず大丈夫だろう。たとえ轍にはまっても、車をアイテムボックスに収納して、別の場所へ出し直せばいいので問題ない。いよいよよとなったら歩くのもありだ。

MAPによれば、街まであと50kmほどだ。時刻は8時。時間的には頃合だ。少しドライブを楽しむ余裕もあった。昨日、自分の力で怪物を退治できたせいかもしれない。車の中は安心感がある。もちろん車の強化も忘れてはいない。

車窓からの眺めは緑が多い。標識も何もない、地面を平らに均ならしただけの道だ。雨が降ったら酷いことになるだろう。

なだらかに続く街道をゆつくりと進みながら、10時前には街に着いた。その竹たけまいは実物を見ると、かなりいかつく感じる。太い鉄材を用いたごついスタイルの門が、入るのを拒否しているかのように錯覚する。少し躊躇ったが、勇気を出して門番に話しかけた。

「こんにちは。私は遠方からやってきた商人です。ここで商売してみたいので、街に入りたいのですが……実は身分証がありません」

言葉は通じたが、説明に納得してもらえなかったようだ。

「何だと？ お前は盗賊の仲間か、どこかの国の間者じゃないのか？ 偽って街に入ったら死罪だぞ？」

ああ、どこの国でもこの手の人は、人を疑うのが商売なんだね。

「金は持っているのか？ 街に入る時には、銀貨1枚徴収されるぞ」

「あつ、すみません。持っていない……」

商品も見せたが、疑いの眼だ。商人のくせに現金も持っていなかったし、名前を書けと言われたが、何と字が書けなかった。もちろん読めもしない。

「商人のくせに字が読めないし、書けないだと？」

また疑われた。身分証の管理も厳しいらしい。

「人頭税の関係で台帳も整備されている。村でも厳しく管理され、毎年村長から担当の役人に

書面で提出され、管轄の領主の下で保管される。お前みたいなのが、ホイホイいるはずがない」
ううっ。甘かった。うちのめされた。この街はそれほど大きくなさそうだったので、いける
かなとか内心では思っていた。辺境の地でも、特に甘いことはないようだ。

「もうこの先に街はない。商売がしたいなら、この街道を戻って村を回れ。辺境の村に来る者
は少ないから歓迎されるだろう」

札を言って、とぼとぼと戻る。捕まらなかつただけマシと思うしかない。

やれやれ、これからどうしたものかと思いつながら、来た道を戻り始める。身体強化のLVを
上げるために、車を降りてわざと歩いていった。休憩しつつ、5時間は歩いた頃だった。いきな
りヒュンツと、何かが空を裂く音が聞こえた。

何だ？　と思う暇もなく、数人の男が前後を塞ぎ、取り囲まれてしまった。どう見ても、お
友達になってくれそうな雰囲気には見えない。足元に矢が突き刺さっている。たまたま時間を
見ようと立ち止まったので、命中しなかったのだ。危ないところだった。いけない、失意のあ
まりリーダーMAPを展開していなかった！　馬鹿か。遅まきながらリーダーMAPを展開す
ると、まっかつか。紛うことなき敵だ。

全部で10人か。薄汚れた革の服を着て、その上から粗末な防具を着けている。いかにも山賊

といった風貌だ。目の前には8人、伏兵が2人。きつと飛び道具を持ってやるな。この世界に銃はあるのだろうか？

手に手に得物を持って、舌なめずりしている。銃は持っていないようだ。代わりに弓矢だ。鑑定すると、こいつらは盗賊で、軒並み殺人などの凶悪な罪状がずらずらと並んでいた。ダメだ、このままでは殺される。瞬時に判断し、車を出してさつと乗り込んだ。この前の怪物に懲りて、随分動きはよくなったようだ。

追い詰めた獲物が、まさかそんな方法で逃げ出すとは思っていなかったらしく、呆気にとられる盗賊たち。大急ぎでドアをロックする。すかさずエンジンをかけてドライブに叩き込み、アクセルオン！ すさまじいエンジンの咆哮と、見たこともないような物体の突進に、盗賊たちは慌てて飛びのいた。そんな時でもシートベルトは忘れない。習慣というものは恐ろしいものだ。

走り去る間際、盗賊たちの持ち物をいくつか目視でアイテムボックスへ回収した。何かの役に立つかもしれない。足元に刺さった矢もとっさに回収しておいた。

ふゝ。危なかった。これは脳内お花畑と言われても仕方がない。命の安い世界だな。このまま放浪するしかないのだろうか。魔物に山賊か。まったく、ありがたくない。

今度はリーダーMAPを展開し、警告アラームも設定しておいた。



襲撃された地点は街から20kmくらいだったが、そこから10km走ったところで村が見えた。地図通りだ。その次の村は30km先に表示されている。

ちよつと空いたスペースで車を止めて、またシミュレーションする。車はやっぱりマズイよな。パンとジューズで腹ごしらえを済ませ、服装のチェックをした。

時計を丸ごと、丈夫なステンレス製に変えてコピーし、アイテムボックスを付与してある。左側には剣とナイフ、槍、斧などの武器を入れてすぐ出せるようにし、火炎瓶やガソリンのインベントリ、発火器具のインベントリも用意した。右側には、いざとなったら岩や鉄板を前に展開して、盾にできるようにした。右で持つものは左へ、左で持つものは右に収納してある。

さっきのこともあるので、念入りに強化の付与をかけ直し、リーダーMAPもしっかり展開する。

勢い込んで村に向かったが、柵で囲まれた村の入り口には誰もいない。でも、どこかで見ているはずだ。歩いていると、声をかけられた。

「お前は誰だ！」

「こんにちは！ 私は旅の商人です」

精一杯の笑顔とともに答える。

「ほお？」

顔に不信の2文字が張り付いている。ちょっと、この世界のファッションと違うからなあ。革のブーツにジーンズ、トレーナーに革のジャケット。背中に大きいリュックを背負っている。ここで爆弾を投下した。

「この先で盗賊を見かけましたよ。あと、これを拾いました」

土がまだ付いた矢を見せる。

男は目を丸くして、村長宅に同行するように迫った。そこで、適当に脚色した内容で説明する。

「向こうの街とこの村との間の1／3くらいの場所でした。人数は10人。凶悪そうなヤツらで、かなり武装していました。先に見つけたので命拾いましたけど」

大げさに、身振り手振りでアピールする。矢を見せると、村長は口髭の生えた口元を一文字にして、口を開いた。

「最近襲われた者もおる。至急防衛の準備をせねばならない。いや、よく知らせてくれたな」「村を襲撃することもあるのですか？」

「もちろんだ。この界限でも10年前に村が襲われた。その村は、今はもうない。この矢は、その時の連中が使っていたものに近い。10人ということはないだろう」

こゝ、こわゝ。

「矢一本でそんなことまで分かるんですね……こんなものも一緒に拾ったのですが」

ヤツらの持ち物の中から、紋章のようなものが入った布を見せた。

途端に村長の顔色が変わる。

「ヤツらだ……」

そう呟くと、しばらく沈黙が続いた。

「ところで、商店はありますか？」

とにかく現金が欲しい。

「あるとも。この先を行けば、村で1軒の小さな店がある。塩は持っていないかね？」

「ああ、ありますよ。塩、胡椒は持っています」

「それはよかった。防衛戦もあるからな。代官經由で入手を依頼しようかと思っていたところだ。店に卸しておいてくれ。村長のダムルに言われたと伝えれば分かる」

村長に軽く頭を下げて、教えてもらった通りに村の中を歩くと、本当に、こぢんまりとした店があった。小屋だな。

「こんにちは。ダムル村長に言われて来ました」

「はい、こんにちは。何だい？ お前さんは。村長が？」

いかにも村人といった感じの店主が、俺をじろじろと無遠慮に眺め回しながら聞き返した。

「私は旅の商人なのですが、途中で盗賊団を見かけまして、なんでも昔、この界隈の村を襲った連中かもしれないということでした。防衛戦の準備に塩などを卸してほしいと言われたのですが」

いつもは使わない丁寧な言葉で答えた。

「何だって？ あの傭兵崩れの連中か！ 分かった。あるだけ出してくれ！」

今物騒な単語が……。一応、すし詰めな感じを装って、実はバッグの倍くらいの量を出す。プラ瓶詰めの容器をガラス容器と木の蓋に置き換えてコピーしたものや、テーブル胡椒の容器を同様にしたものなどを並べる。

「こりゃあ」

と言って目を丸くする。ヤバイ、まずかったか？

「何か？」

「立派な容器だな。高いんじゃないかい？」

「さあ？ そんなに高くなかったですけど」

全部木にしておけばよかったか。もう遅い。これで押し切ることにした。

「今はそんなことを気にしている場合じゃないですよ。さあ、査定してください！」

「分かった。そうだな。せっかく来てくれたし、容器も上等だ。物もよさそうだし、1個銅貨5枚で引き取ろう」

俺は少し考えるような素振りをしてから、

「分かりました。初めての取引ですし、それですと、いかにもサービスした感じでした。っこり笑う。

塩と胡椒各100で、銅貨1000枚分。銀貨2枚と大銅貨30枚、銅貨500枚を受け取る。「悪いな。こんな村だからどうしても細かくなっちゃう」

「いえいえ、よい取引をありがとうございます。ちなみに宿はありますか」

「ああ、酒場を兼ねて1軒だけある。おまえさんみたいな行商人が泊まるくらいだ。期待はしないでくれ。その代わり安いぞ。銅貨5枚くらいだ。わははは」

よかった！ 物価が安い。たぶん銅貨1枚で100円くらいかな？ とすると、今の手持ちは10万円くらいか。悪くない。

お金は手に入れたが、これをコピーしてしまうわけにはいかない。盗賊たちのステータスには「賞罰」が付いていた。お金のコピーをやってしまったら、確実に「賞罰」が付くだろう。

いざとなったら、隠蔽スキルの出番かもしれないが、この世界は油断ならない。隠蔽を無効にするような、魔法や魔道具がないとは限らない。そんな危険は、絶対に冒すわけにはいかない。俺は、もともと極端にリスクを嫌がる人間なのだ。

そもそも、金をコピーなんて精神的に受け付けられないし、そこそこ稼げそうなので必要もないだろう。

宿は簡単に見つかった。宿屋というのも憚^{はばか}るほどに、ボロい建物だった。

「こんにちは。旅の商人です。泊まりますか？」

「ああ、1泊銅貨5枚になるよ」

「お願いします」

銅貨5枚を払って、部屋に移動する。狭い部屋で、粗末なベッドと寝具しかない。これと比べたら、日本のビジネスホテルのシングルルームはスイートルームに思えちゃうな。でも、屋根の下で安心して寝られるだけで御の字だ。何より激安というのがいい。

部屋でくつろぎながら、盗賊との防衛戦に巻き込まれた時のために武器を確認する。

- ・ 剣：66 cmの短刀。99 cmの大刀。シヤベル
- ・ 槍：46 cm刃を付けた投擲用短槍。66 cm刃を付けた大槍

- ・斧…2倍拡大の大斧。投擲用手斧
- ・ナイフ…投擲用16cmの2倍拡大アウトドアナ이프。肉切り包丁。鉈
- ・投下用車分解鉄板…1・5m×2m。幅10cm×1mの比較的尖ったもの
- ・車分解重量物…フレーム・エンジン・AT・デフ・ホイール
- ・火炎瓶…ウイスキー瓶×2。焼酎瓶×1
- ・ガンリン…インベントリ内
- ・投下用岩…直径30cm、50cm、1m、2mの各サイズ
- ・投擲用石…5cm、10cmの各サイズ
- ・投下用大型剣…刃長99cm、1・98m、6・6m、9・9m
- ・盾…車のドアを強化したもの。ドアの取っ手を持って使う
- ・兜…圧力鍋を強化したもの。あご紐を付けて、蝶々結びにして使用

何だか…悲しくなってくる。もっといいものが欲しい。爆薬系の武器を作れないだろうか。ネットの情報を見ながら、少し実験を試してみた。

インベントリ内でバッテリーの希硫酸から水分を分離し、濃硫酸を生成。インベントリ内は、設定で状態固定を外してある。ヤバそうなら、ファイルごとゴミ箱へ捨てればいい。車の排気

ガスやコンロの燃焼ガス、小便の中のアンモニアなどを原料に、一酸化窒素、そして二酸化窒素を精製する。そこから硝酸を作り出した。その硝酸と硫酸によって、混酸を生成した。

グリセリンも車関係から分離した。ニトロセルロース、ニトログリセリン、硝酸アンモニウム。とても素では扱いたくない危険物ばかりだ。不安定な物質が多いので、時間停止をしたインベントリに移す。ニトログリセリンからはダイナマイトを生成した。

もっと安定感のある物が欲しかったが、現状ではあまり複雑な物は作れそうにない。プラスチック素材の瓶の容器にダイナマイトを詰めて、天辺に穴を開ける。細い車のハーネスのチューブにニトロセルロースを詰めて、導火線にした。点火してから発火までの時間が読めないの
で、テストしたいところだ。

ん？ ニトログリセリンなら高所から落とすだけで十分かもしれない。そのうちアイテムボックスから投下して実験してみよう。

ダイナマイトの瓶にボルトやネジ、薄い小金属部品などを詰めて、榴散弾も作成した。破片を撒き散らすタイプの手榴弾みたいなものだ。金属の配置も工夫する。

あと、ガソリンの大型容器を作っておこう。クーラーボックス標準で30L、2倍コピーで40L、20倍(240KL)まで用意した。最大サイズがタンクローリー2ダース分という、とんでもないものになってしまった。数キロ四方を焼き払えるレベルだぞ。

武器を作り終えたので、少し村の探索を行ったが、あつという間に終了した。ホントに何もない村だ。領主館だろうか？ ちよつと立派な建物には、馬がいた。鍛冶屋、そして革職人の店の他には、教会しかない。本当にそれだけだ。酒場と商店はメジャースポットだったんだな。やっぱり、街に入りたかったよ。

お金は貴重なので、飯は自前のコピー品で済まそうとしたが、情報収集のために酒場に向かう。夕方ともなると、酒場はそれなりに賑わっていた。古びたテーブルや椅子が並ぶ。村人とおほしき人たちで、8割方埋まっていた。

爺さん2人がかしましく喋っていたので、そのテーブルの横に座って声をかける。

「こんばんは。相席させてもらっていいですか。旅の者ですが、いろいろお話を聞かせていただきたくて」

まずは丁寧に挨拶をした。

「ああ、いいとも」

暇な老人というものは、いろいろ話をしたがるものだから、情報収集には打ってつけの相手だ。ささつと、席を移った。

「お姉さん、こちらのおじ様たちと同じ酒をちょうだい。おじ様たちにも、御代わりをお願い

い！」

「あいよー」

早速お酒を奢る。はつきり言って、お姉さんを20年くらい前に卒業したご婦人から、活きのいい返事がきた。

「分かっているじゃないか、若いの！」

店の人にオススメの料理を聞いて、それを頼む。先にワインが来たので、まずは乾杯だ。

酒が進むにつれて、いろいろな話を聞かせてくれた。細々と商売していたので、あまり大きなお金を見たことがないと言うと、1人の爺さんが以前村を出ていたそうで、お金の話を聞かせてくれた。

「銀貨の上には、大銀貨、金貨、大金貨、白金貨がある。さらにその上もあるらしいが、さすがに知らんな」

その上があるんだ……。

爺さんはワインを、ぐいっと一口飲みながら続ける。

「昔、商人が扱っている大金貨を見たことがあるが、一般人は金貨さえ拝むことは少ないだろうな」

「時刻についてはどうやって知るんですか？」

「おぬし、何にも知らんのだな。1日は12刻で、街では3刻（午前6時）から9刻（午後6時）まで鐘で知らせてくれる。油は高いから、灯りは酒場くらいでないと使わない。あとは、代官と村長の家くらいだろう」

時計が役に立ちそうでよかった。MAPは違うが、やはり地球と同じような惑星なのだろう。重力に全く違和感がない。恐らく1年も365日だ。ここは平行世界、あるいは隣の世界なのだろうか。まだ日本に戻れる可能性がありそうだ。

「村にはどれくらいの人が住んでいるのですか？」

「この村は400人くらいの小村だ。今日は盗賊の話聞いたが、本格的な襲撃を受けたらキツイ。ここは辺境だから生活も厳しいし、ダメージを受けたら立ち直れないだろう。昔もこの辺りで村が1つがなくなつた。魔物の襲撃で立ちゆかなくなる場合もあるしな」

「魔物ですか。どんなのが出るんですか？」

俺は、昨日の魔物を思い出していた。

「まあ、この辺りは一般的なものだな。ゴブリン、オーク、狼、熊、猪。蜘蛛が巣食うこともある」

「……物騒ですね」

俺は顔が自然に歪むのを感じた。あの魔物の、精神に直接捻じ込んでくるような嫌な感覚は

忘れられそうもない。

「まあ、そこはほれ、冒険者の出番だ。ゴブリンは、単体なら村の男でも撃退できるが、オークは無理だ。村総がかりで退治だな。狼は群れを作るから危険だ。熊なんか出ようものなら、その場で冒険者ギルドに討伐依頼決定だろう。ここは辺境だから魔物も多い」

そうなのか。よく知らないので、結構歩いて移動していたよ。山の中でなくても、魔物が普通に出来るのね。自分の攻撃手段は遠距離の物理兵器が多いし、強い攻撃は派手すぎて使いづらい。

「冒険者って、どんな人たちなんですか？」

「冒険者ギルドに登録したヤツらだ。ランクの低いヤツの中には食い詰め者もいるから、気を付けることだ」

興が乗ったのか、ワインのコップを振り振り、爺さんがでかい声で喚く。

「この村では冒険者の登録はできないんですか？」

「ああ。ギルドカードは身分証にもなるから、街に入れないような者には発行されない。ギルドマスの審査がある。怪しいヤツはあっさりはじかれる」

「そうですか……。他に身分証を手にする方法はないんですか？」

「大きな商會に雇われるか、村長や村の領主の信頼が厚ければ、身分証を出してもらえること

もある。ただ、そういうのは基本的に村人だけだな」

これは、思ったよりも街への道のりは厳しいな。

「村人になるには？」

「村長や領主の承認が必要だ。おぬし、なりたいのか？ まあ、頑張れ！」

いや、微妙です。一生村人コースだよ、それ。

「この国って、他国と比べて大きい方ですか？」

「まあ大きい国だな。王都は遠いがでかいぞ！ いろいろなものがある。王宮や王族貴族の屋敷、大商人の豪邸。大劇場、高級商店、高級レストラン、貴族の学校なんかもある。さまざまな工房や宝石店、高級服屋などもある。広場じゃ催し物もやっておる。武器防具なんかも、すげえのが揃っていやがるぞ。ミスリルやオリハルコンみたいなものもある。まあ拝むことすら難しいがのう」

魔法金属！ ぜひ拝んでみたい！ とうか欲しい。コピーできるかもしれない。

「へえ、いいですね」

「まあ簡単には入れてくれんがな。門はいつも長蛇の列じゃ。貴族はもちろんのこと、商人やある程度のランクの冒険者はフリーパスだが」

ですよー。

「そうそう、この国は稀人が作ったという伝説がある。王家や公爵家なんかは、その子孫なんだぞうだ。本当かどうか知らんが。ああ、稀人というのは、ここではないどこか他の世界からやってきた人らしい。いろいろ不思議なことができたりするそうだが、眉唾ものだな」

マジですか……。

さらに1杯奢ったので、爺さんたちの話は続く。

「この国は稀人を保護する決まりになっているらしいが、実際にはどうだか。貴族連中なんかは捕まったりしたらきつと大変だ。だが、王都には入れないだろうから、国に保護されることはないんだろうな。まあ伝説や噂の中の住人だな。初代国王も、物語や伝説の主人公だし」

何てこった。用心深くしておいて、よかった。それにしても、何て物知りな爺さんだろう！
村人レベルを超えているぞ。

「貴族様の話は？」

「この村の領主様は騎士爵様だな。4つの村とエルミアの街を統治されていて、ご自身はエルミアの街に住んでおられる。村にいるのは代官だ。まあ辺境の地だから苦労されているよ。悪い人じゃない。他の騎士爵家も似たりよったりだ。中には実績を上げようと、無理しているところもあるから気を付けな」

貴族か。トラブルの香りしかないな。気を付けよう。MAPでパッと見ても、この国の広

さは日本の6倍以上ありそうだ。貴族といつても、いろんな人がいそうだからな。

「そのところを、詳しく教えてくれませんか」

俺はメモを取り出して、爺さんたちの話を書き付けていた。

「騎士爵様の上が、この地方をまとめておられる男爵様。5つの街を傘下に治める大領主だ。ご自身も大きめの街を治めておられる。そう悪い評判は聞かぬが、その下は似たりよつたりだなあ。領主次第で、人柄や考え方など人によりけりだ」

ワインを飲みながら続ける。

「さらにその上となると、この南部を治める大貴族の伯爵様だ。そこまでいくと、わしらもよく分からんな。その上が、その寄り親の王都の侯爵様で、その上が国王陛下だ。基本的に常識外の無理をするような人はそういない。国王陛下がお許しにはならんよ。まあ、王都とかの下級貴族はやらかしているかもしれないし、威張っている人はたくさんいるが。他の国に行くと、とんでもないところもある。河を越えた隣国の国民なんて、可哀想なもんだよ。亜人も迫害されておるし、たくさん奴隷にされておる」

隣の国に行かなくてよかった。ここなら、うまく立ち回れば国に保護されることさえ可能だ！ 亜人奴隷が気になるなあ。ケモミミか、エルフか。

よし、当座の目標は決まった。どこかで身分証を手に入れる。できれば冒険者の資格がいい

だろう。王都へ行って文化的な生活をする。ケモミミ、もふもふも必ずや……。

あとは、スキルを磨こう。身体強化とか諸々レベルを上げて、MPも増やす。魅力的な商品も開発しよう。そして、望みは薄いけど、日本に帰る方法を探すか。

「あ、そういえば、魔法は？」

「基本におお貴族様のものだ。ただ、貴族の三男以降や、没落して平民になるものもいるので、貴族以外にも魔法を使う人はいるが、かなり珍しい。中でも収納の魔法持ちは引っ張りだ。だな。王都の商人なら雇いたがるだろう。あと貴族も。変なのに目をつけられると大変らしいが」
それはいいことを聞いた。

「いやあ。いろいろ聞かせてもらってありがとうございます」

「なんの、なんの。わしらは、そういうことくらいしか楽しみがなくてな」

「あ、お姉さん、お勘定」

「銅貨50枚よ」

俺は、虎の子の銀貨1枚を渡す。

「これでおじさんたちに飲ませてあげて」

「じゃあよい夜を！ いろいろお話をありがとうございました」

爺さんたちに礼を言っつて、席を立つ。

試し読みはここまで

続きは書籍版でお楽しみください

書籍情報はこちら

http://books.tugikuru.jp/detail_ossan.html

